

数々の伝説と伝承を生む、
山深い大道地区の入り口



くち おお どう 口大道

岩盤を避け、登って降って右へ左へ。

大道は山の中である。久保川口のバス停留所から北へ約4km行くと口大道に入る。クネクネと木立の中を行く道は、所々狭くなっているがスイスイ行く。今でこそ、このように整備されているが、それまでは苦難の歴史であった。久保川に沿ってせり出す山肌は強固な岩盤が多く、人力の時代は岩盤を避けて川へ降りるように道を作った。もちろん車が通ることは想定していない。徒歩と牛馬が通行することを前提とした、登って降って右へ左への道であった。崩れることもしばしばで、住民たちが都度補修を重ね、この生命線を確保してきた。

そんな状況を一気に変えたのが、岩盤を砕くダイナマイトである。これによって登り降りの苦勞がほぼなくなった。小さなトラックなら通行が可能になった。古老が言う。「小学生の頃、授業中によく発破の音がしよった」と。発破の音は、当時の大道の人々にはさぞ頼もしく聞こえたことであろう。

平家落人(平教経とその家来)伝説と 芝日光院伝説

大道は平家の落人が切り拓いたと言われている。久保川地区(先月号参照)の口大道近くに「平家滝」という所がある。また、この久保川沿いには、平教経が落ち延びる際に改名したとされる「門脇姓」が多い。(家来の姓だったという説もある)。平教経については生存説にも諸説あるし討死説もあり、伝説の域を出ないが、この山深い大道に立つと「来たに違いない」という気がしてくる。

平家の時代から時が流れた江戸時代。口大道には芝日光院という行者(山岳信仰などの修行をする人)がいたらしい。彼は腕っぷしが強く、また不思議な力を持った男として広くその名が知られていた。伝承では、この日光院が、村の産土神を大元神社から黄幡神社に移行したとされている。黄幡神社および黄幡という姓は現在の広島県西部に多いそうだ。

八角に削って出荷された「大道松」

さて、大道といえば大道松である。口大道でも大道松の出荷が盛んに行われた。運搬時の利点から、切り出された丸太は手斧で八角に削ったという。実際に使われていた手斧が今も残るが、これを使いこなしていた先人の技術たるや、尋常ではなかったであろう。



大切に保存されている手斧。右利き用と左利き用がある。

町のうごき

(2月29日)	人	口	前月比	出生	死亡	転入	転出
男	7,365	-21	男	2	19	13	17
女	7,974	-13	女	2	16	9	8
計	15,339	-34	計	4	35	22	25
世帯数	8,052	-11	(2月中の届出)				

窪川地域 10,934人 大正地域 2,098人 十和地域 2,307人